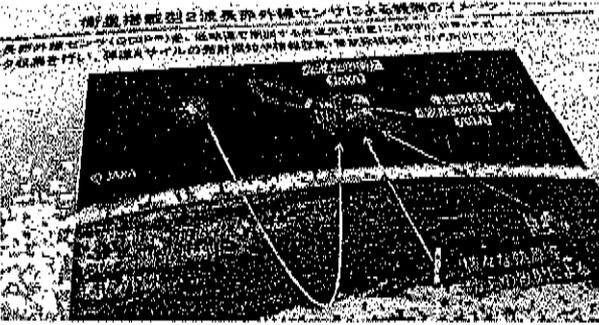


ミサイルセンサー搭載

JAXAの観測衛星



「2波長赤外線センサ」による観測のイメージを示した防衛装備庁の記者会見資料

宇宙航空研究開発機構（JAXA）が開発した災害状況観測などに活用される地球観測衛星「だいち3号」が日ロロケット初号機に搭載され、近日、鹿児島県・種子島宇宙センターから打ち上げられる予定です。だいち3号には、ミサイル発射などを検知する防衛省「2波長赤外線センサ」が搭載されており、同衛星で初となる宇宙空間での実証実験を進めようとしています。（原千祐）

「今回のセンサーは、介技術戦略課長はこう強くも研究用。地上で実証していたセンサーが宇宙でもちゃんと使えるかどうかが必要」

「1日に観測された記者会見で防衛装備庁の藤井圭介

抵抗感薄めさせ
宇宙での実証実験につ

「2波長赤外線センサ」は、中赤外線と遠赤外線線の二つの波長を同時に検出可能。2種類の赤外線の特徴の違いを利用して、目標の識別能力を向上させ、ミサイル発射などの熱源を感知しやすくなります。

科学 レポート

防衛省初 実証実験を進める

いて藤井氏は「衛星の周回軌道に合わせて地表や地表、海面などからの太陽光反射による赤外線画像や、地表をまた熱源からの赤外線画像を収集する」と説明。季節や地域ごとの地球表面の赤外線画像をデータベース化した「弾道ミサイルの発射探知や情報収集・警戒監視機能への適用可能性について検討する」としています。

防衛省は「初の宇宙用センサーの研究開発を通じて、その成果をさまざまな装備品などに反映」と述べています。

「だいち3号の運用の範囲内で実験を行う」とはいったものの、JAXAの地球観測衛星を活用した軍事に関する装備拡大に前のめりの防衛省の狙いがにみ出しています。

また同省は、防災や警備、監視、衝突防止など「デュアルユース（軍民両用）技術として、民生分野への展開も可能」とも述べています。民生に利用できることを強調する「だいち3号」軍事だとなが

る技術開発への抵抗感を薄めさせる意図が感じられます。

早期警戒衛星も

早期警戒衛星（弾道ミサイル発射の探知などをを行う偵察衛星）の保有を含めた今後の展開について

安保3文書もとづく軍拡



井原聡・東北大学名誉教授（科学技術史）の話
防衛省の「2波長赤外線センサ」は、敵基地攻撃能力に不可欠な基礎技術として、かねて研究が進められてきたもので

「敵基地攻撃能力」保有を閣議決定した「安保3文書」の一つ「国家防衛戦略」では、統合防衛ミサイル防衛能力の強化がうたわれており、「防衛力整備計画」では、衛星の活用を強調している。

て防衛省は「いよいよデータが取れるから分らない」と言及を回避。独自の早期警戒衛星の保有を目的とした研究ではないとしながらも、「同盟国との協力等の代替手段、わが国における技術的実現可能性、費用対効果等を十分に勘案した上で（保有の）要否も含め、政府全体で考えるべきもの」と述べ、将来の日本独自の早期警戒衛星の導入を否定しませんでした。

またJAXAの2021年度の「業務運営に関する計画」では、早期警戒能力の確保に向けた小型衛星について「米国との連携を含む今後の政府の検討を踏まえ、政府の求めに応じて、将来必要となる要緊技術に係る研究開発等を推進する」と示しており、防衛省と一体となって早期警戒衛星の開発に協力する目的があります。

JAXAの地球観測衛星に搭載された「2波長赤外線センサ」の実証実験は、安保3文書にもとづいた大軍拡の一環を踏々と進めてきた計画としてみてよいのではないだろうか。